



写真による挿絵 : 世紀転換期フランスの新聞・雑誌メディア

増田, 展大

(Citation)

美学芸術学論集, 4:99-100

(Issue Date)

2008-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCoDOI)

<https://doi.org/10.24546/81002338>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002338>



【修士論文要旨】

写真による挿絵—世紀転換期フランスの新聞・雑誌メディア

増田 展大

本論文は、19 世紀後半のフランスに流通した新聞・雑誌メディアを考察の対象としている。その際、紙面上に掲載された挿絵や写真に注目することによって、視覚メディアが社会においてどのように機能するのかを歴史的に考察していく。

これまで挿絵と写真は、それぞれ異なる領域において研究されてきた。しかしながら、本論が 19 世紀後半の新聞・雑誌メディアに着目するのは、そこで諸々の視覚イメージが多層的に重なり合っていたからであり、視覚メディアが相互的に影響を与え合う様子を広範な社会的文脈から捉え直すことが可能になるからである。

当時の視覚メディアに特化した先行研究のひとつとして、写真史の議論がある。それが強調するのは、19 世紀末のハーフトーン製版の実用化—点の集合によって写真を紙面に印刷する技術—である。この技術によって写真は文字と並置され、マス・メディアに載って大量に社会に流通することとなった。確かに、それ以前の紙面を占めていた挿絵が写真に「取って代わる」ことは、人々に多大な影響を及ぼしたかもしれない。だがここで問題にしたいのは、そうした歴史記述をおこなう写真史の議論が、技術決定論的な記述に収まると同時に、挿絵と写真の視覚イメージの関係を単線的な移行とみなしていることである。そのことは、次のような観点を自明視していることに由来する。すなわち、「出来事をありのまま映し出す写真が、それまでの挿絵を駆逐した」という考えである。

昨今の写真研究において、「写真がありのままを映し出す」というような考えはしばしば批判の対象とされている。ただし、本論における他の先行研究—文化史や新聞・雑誌研究—において、これらの観点はいまだに共有されている。要するに、そこには「人の手を介したことで、想像の産物として製作された」挿絵と「機械的なプロセスを介して、リアルなイメージを自動的に製作する」写真、という対比が堅固に残っているのである。

それに対して、本論は異なる立場をとる。写真イメージの「リアリズム」は、あくまで写真的なものに過ぎない。視覚メディアにおいては、諸々のコードが交換されることによってイメージが形成されているのであり、その都度人々はイメージに対して、一定の意味や価値を付与しないしは認識するのである。こうした観点に立つとき、19 世紀後半のメディアを再考する価値が明らかになる。なぜなら上述したように、当時の新聞・雑誌メディアの特異性は、挿絵や写真などの視覚メディアが多層的に重なり、その様子を紙面上に見てとることができるからである。それらの様子を分析することで、写真と挿絵に関する従来の単線的かつ技術決定論的な歴史記述を批判すると同時に、メディア上で多様な視覚コードが相互に影響し合い、また諸々の価値観がそこに絡み合う様子を確認すること、以上が本論の目的である。

そこで、以下のような手続きがとられる。まず第一章では、新聞・雑誌を対象とした先行

研究を概観する。そこには主に3つの分野がある。先の写真史の議論に加え、一方には新聞・雑誌を「社会の鏡」とみなし、19世紀の社会や文化を探ろうとする文化史研究、また他方では、新聞・雑誌を政治的イデオロギーが多分に含まれた言説空間として捉え、そのことを批判的に検証しようとする新聞・雑誌研究がある。ここでは、これら先行研究に共通した挿絵と写真の断絶を指摘すると同時に、そこに欠けている問題意識を明らかにする。

第二章では、挿絵入り日刊紙 *Le Petit Journal* をとりあげて具体的な分析をおこなう。写真印刷が実用化されたのと同時期に、流通量において驚異的な数に達していたのは、これらの大衆紙であった。ただしここで問題となるのは、その量的規模だけでなく、実際に人々がどのようにして大衆紙と挿絵を受容したのか、つまりイメージの消費や流通の側面についてである。政治的論調を排し、5サンチームという低価格を実現した *Le Petit Journal* の紙面には、当時のパリを賑わせたテロや猟奇殺人、自殺などの「三面記事」が掲載され、紙面上では虚実が交錯していた。その表紙を飾る多色刷りの挿絵は、ショッキングな事件に遭遇し、恐れ慄く人々の立ち振る舞いを鮮明に描出している。これらの挿絵は、写真と結びついていただけでなく、おなじ紙面上に並置された連載小説—ここでは、探偵小説を取りあげる—、また紙面外の視覚メディア—とりわけ、死体公示所（モルグ）—などと結びつきながら、イメージを形成し、人々の目を楽しませるように機能していた。換言するなら、この日刊紙が引き起こしたのは新聞メディアの大衆化と同時に、都市生活のスペクタクル化だったのである。

挿絵と写真のさらに直接的な影響関係を見直すため、第三章では週刊誌 *L'illustration* をとりあげて考察する。この高級誌の分析から、紙面上の挿絵は、写真や絵画などのイメージと視覚コードを積極的に交換していたことが明らかとなる。とりわけ、写真を直接転写した挿絵、「写真による挿絵」に注目してみれば、1870年代をひとつの転機として確認することができる。普仏戦争やパリ・コミュンなど、歴史的惨劇がフランスを襲ったこの時期、挿絵は写真と重なり合いつつ、その主題や構図設定において大きく変容しているのである。そこでそれら視覚イメージの生産という実践に注目するため、当時の挿絵において重視された構図設定とそれを用意した諸条件を考察する。その作業は同時に、当時の挿絵がどのような機能を備えていたのか、そこにどのような価値観が反映されていたのかを再考することにつながる。

これらの手続きによって、「挿絵が写真に取って代わられた」という単純かつ現在的な観点は無効化される。20世紀に至り、新聞・雑誌上に掲載された写真イメージは、挿絵からの断絶であるだけでなく、挿絵によって用意された周到な構図設定を取り入れることで、「写真的リアリズム」を獲得することにもなったのである。ここには、挿絵と写真との振れた関係性が認められる。そのことを19世紀の新聞・雑誌から捉え直すことで、メディアとして社会に流通する視覚イメージの動的な機能や相互的な影響関係、そしてそこに交錯する人々の多様な価値観を明らかにすることができるだろう。

（※本稿は2008年1月16日に提出した修士論文の内容を要約したものである。）

（ますだのぶひろ：神戸大学人文学研究科博士課程前期課程）